

落語「田能久」をめぐる

―「饅頭こわい」附記―

岡田 充博

一

前回「饅頭こわい」での予告に従って、本号には補足の短文を綴らせていただくことにする。

余り知られていない演目であるが「一」、「田能久」という噺がある。東大落語会編『増補落語事典』(青蛙房・改訂版、一九九四年)の梗概を借りれば、次のような内容である(二八五頁)。

阿波の国田能村の久兵衛という男、田能久の愛称で呼ばれていたが、芝居がうまく、あちこちに興行して歩いた。伊予の宇和島で興行しているときに、母親が大病という知らせを受けたので、急いで徳島

へ帰ることになった。

途中法華津峠で、白髪の老人に会った。これが大蛇の化けたので、名を名乗れという。ぶるぶるふるえながら「田能久です」というと

「なに、タヌキ？うまく人間に化けたな。もつといるんなものに化けて見せる」

舞台用の道具を使って、いろいろな姿になって見せると、大蛇は感心し、

「おまえのこわいものは何だ」

「金がかたきの世の中といいますから、金が一番こおうございます」

「おれのこわいのはたばこのやにだ。決して人にい

うな」

そのうちに老人の姿が消えたので、田能久は山をおりた。

ふもとの村で大蛇の話をすると、みんなよく帰つて来たどびつくり。さつそくたばこのやにを集めて、大蛇退治に行く。大蛇はびつくりして逃げ出した。田能久が家に帰り、母親の病も本復してやれやれと一と息ついていると、血だらけになった大蛇が「よくもおれの秘密をしやべったな。その仕返しに、おめえの大きらいなものを持つて来たぞ」といつて、庭へドシリと千両箱をほうり込んで行った。

孝子譚、人情噺的な要素も入っていて、主人公の久兵衛は、根っからの正直者で親孝行という設定になっている。彼が「金が怖い」と言つたのは本心からであつて、大金を獲ようとしてウワバミを騙した訳ではない。従つて、饅頭食べたさに悪知恵をはたらかせた、「饅頭こわい」の松つあんとは大違いということになるが、実はこの話、すでに前稿で述べたように日本の昔話をもとにしていて、さらに遡れば六朝の志怪小説にまで行き着く。そこで今回は、この落語「田能久」から日中両国のそうした類話へと、視線を向けてみることにする。

二

先ずは日本の昔話から見よう。『日本昔話通観』には、作品番号六六三の「たのきゅう」として、青森から長崎・熊本に至る三十二県より採取された話が収められている²。様々なヴァリエーションがあつて、類話等を含めれば百二、三十にも上り、随分人気のあつた話だつたことが分かる。久兵衛の出身地である徳島県での採録話を見てみると、香川の「さめきゅう（原題・讃岐の久太郎）」の類話としての簡略な紹介だが、七話が紹介されている。そのうちの幾つかを左に挙げてみよう（第一、巻四四〇～二頁）。

伊予の役者が大阪で興行中、親が危篤との知らせを受けて帰り、山の峠で日が暮れ、辻堂に立ちよると化け物が出て、おたがい役者、狸と身分を明かし、役者が武士になつて刀を抜くと狸はその化け方に感心する。お互いに恐ろしい物を探ねあい、役者は小判、狸は唐がらしと答える。つぎの夜の再会を約し、役者は唐がらしを集めて狸の穴をふす。狸は仇討ちに小判を集めて役者の家に投げこんだ。

（類話2 海部郡穴喰町西町）

親孝行な息子が大阪へ行き役者の弟子入りをする

が、二、三年して母親が病氣との手紙を受けとり、敦盛と照手姫のかつらを籠の中に入れて帰る。土佐の白髪山の近道を越して道に迷い、炭小屋に入つて夜を過ごす。とつぜん山鳴りがして山爺が現われ、お前は何かといったので、「田能久」と名を言うのと、狸と間違われ、化けてみよと言う。敦盛と照手姫になると感心し、明晩また来ることを約束し、お互いの恐ろしい物を尋ね合う。息子は小判、山爺はたばこのやにと答える。つぎの朝、炭焼きにこのことを話すと、炭焼きは村へもどつてたばこのやを集め、つぎの夜、山爺の頭からやにをふりかける。しばらくして、息子が家にいると、怒った山爺が現れ、千両箱を持って来て息子に小判をぶつつける。息子は母親と共に幸せに暮らした。

(類話 4 三好郡井川町井内谷中津)

たのきゆう兵衛という名の旅役者が芝居をして歩いてたが、父が病氣との手紙を受け取り、急いで帰る途中、峠で日が暮れる。小屋に泊まろうとすると、ふしぎな者が現われ、お前は何かと聞いたので「たぬき」と答えると、化けられるかと尋ねる。たのきゆう兵衛は衣装を出して、侍と御姫さんに化けると、その者は感心し、お互いに恐ろしい物を尋ね

あい、「金」「松やにと酒」と答える。つぎの日、村人にこのことを話すと、村人は松やにと酒を集めて、夜山に登り化け物退治をする。しばらくして、たのきゆう兵衛が家にいると、この間の男が訪ねて来て、お金の入った箱を仕返しに投げつけ、その家は金持ちになった。

(類話 6 三好郡西祖谷山村重末)

この話は四国各地に伝わり、なかでも愛媛県東宇和郡宇和町の「田能久」は、原題が「法華津峠の田の久」で、落語の内容と極めて近い。かなり長く詳細なたちで紹介されているので、ここでは割愛するが、大蛇にきらいなものを聞かれて答えるくだりは次のようになっている

(第三卷四三四頁)。

もともと、田の久は頭の良く回る気のきいた男であつたもんじゃけん、ここで思案のしどころとばかり、「へい、わたしは別に好きなもんとてございませんがのう。あれ、小判、あの小判が一番きらいで、見ただけでぶるぶるとして、身の毛がよだつほどでございませう」と、まことしやかに答えたんだすと。

民話の中では、こうした相手を騙す魂胆からという設

定が多く、本心から「金がこわい」と言う例は極めて少ない〔3〕。正直な善人の言葉とするのは、やはり後の脚色と見てよいであろう。

弱みを見せるふりをして利益を得る話は、これも前回触れたように他に何種もあつて、それぞれ「何がこわい」「宝物交換」「石肥三年」といった題名で括られる話群を形成している。こちらでも簡単に覗いておくことにしよう。

「何がこわい」は作品番号六六一。青森から沖繩に至る四十四県より、類話・参考話を含めると二百五十にも上る数多くの話が採取されている。内容もバラエティーに富んでおり、「たのきゅう」と融合あるいは同化している話も多い。たとえば、長崎県壱岐郡郷ノ浦町の話などは、原題が「狸久」となっている（第二十四巻、長崎・熊本・宮崎の四〇二～三頁）。ここには、梗概で収載されている新潟の話を手挙げておく（第十巻七五二頁）。

旅の芸人が峠の炭焼き小屋に泊まると、夜なかに化け物が来て、「しようすけしよっぱ、おかさにべんがらしよっしよのしよ」と踊るので、芸人もふるえながら踊る。化け物がおもしろがつて、「教える」と言うので、芸人は「明日教える」と言つて、「この世で何が一番恐ろしい」と聞く。化け物は「たばこの

やに」と言い、芸人は「大判小判だ」と言う。翌日芸人が化け物の口にやにを入れると、化け物は逃げる。芸人が宿で寝ていると、化け物が「仕返しだ」と大判小判をまき、芸人は一生安楽に暮らした。

（南蒲原郡下田村）

また同巻には、「山寺の怪——何がこわい型」として、次のような話も紹介されている（二三三頁、原題は「くもの化物」）。

旅の坊ん様が、化け物が出るという寺に泊まる。夜になると、くもの化け物が出てきて坊ん様に「何が一番こわい」と聞く。「お金が一番こわい」と言うのと、くもが金をまいたので、坊ん様はふところに入る。今度は坊ん様がくもにいちばんこわいものを聞くと、くもは「箒のようなものがこわい」と言う。村の者が寺に来てみると坊ん様は無事で、そのわけを話す。みんなでもくもを退治して、坊ん様はその寺の住職になった。

（西蒲原郡巻町福井）

「宝物交換」は、作品番号六六二。こちらも青森から沖繩に至る二十四県の、百四十五の話（類話・参考話を含む）が採録されている。博打打ちが天狗の呪宝をだまし取るというのが基本的な展開で、鼻高扇型と隠れ蓑型の二系列

に大別される。前者を秋田県、後者を岐阜県の話（いずれも梗概）で示しておく。（第五卷五五六～七頁、第十三卷四七〇～一頁）

怠け者の息子が家屋敷をなくして、花札を一枚ふところにして山に登り、花札を目に当てては、「娘が見える、江戸が見える、津軽が見える」と言っていると、天狗が出てきて何でも願いのかなううちわ「あとでは扇となつてゐる」と交換に花札を借りる。息子が「何が一番こわいか」と聞くと、天狗は「サイカチバラが一番こわい」と言う。天狗が同じことを聞くと、息子は「アンコモチが一番こわい」と言う。天狗は花札を目に当てても何も見えないので、だまされたと怒るが、息子が扇の力でサイカチバラの中に隠れたので近づくことができない。天狗があんこ餅を投げつけると、息子は腹いっぱい食べるので、あきれて帰ってしまう。

息子が町へ出て、下女を連れだ美しい娘を見、扇であおいで鼻を高くすると、娘の家では医者やはり師を頼むが治らない。そこへ息子が出かけていって、何日もかけて少しずつ鼻を低くしては金をもらい、ごちそうになる。息子は金持ちの娘の鼻を高くしたりふしぎな病気にしたりして金をもうけ、りっぱな家屋敷を買ってよい身分になる。ある日、息子が退

屈なので自分の鼻を高くして遊ぶと、高くなった鼻が雲の上まで伸び、雷の親方が雷の息子たちに針で打ちつけさせる。息子が鼻を低くすると自分の体のほうが上がつていき、中天ぶらりんになって世を送った。

（山本郡峰浜村）

橋の上で少し足りない男がさいころをひっくり返して見ていると、天狗が来て、「何をみているのか」と尋ねる。男が「これは表を見ると京都、裏を見ると大阪が見えるいいものだ」と答えると、天狗は「宝物の隠れ蓑と隠れ笠と取り替えてくれ」と言う。天狗が男に「一番嫌いな物は何だ」と尋ねるので男は「かい餅が嫌いだ」と答えると、天狗は「自分は茨の藪が嫌いだ」と言う。男は隠れ蓑と隠れ笠をつけて祝言の席に行つてはごちそうを食べる。男が山へ焚き物をとりに行つてゐる間に、女房は押し込みに隠してあつた隠れ蓑と隠れ笠を見つけて火にくべてしまう。男は帰つて悔やむが仕方がないので茨の藪を山から切つてきて家のぐるりを巻く。天狗がかい餅を持ってきて、「この嘘つきめが」と投げこむと、男はおいしい餅をごちそうになつて喜んだ。

（大野郡丹生川村駄吉）

後者の話では、焼かれた隠れ蓑の灰を体に塗って出かけ、灰が落ちて失敗するという展開が多い。

「石肥三年」は、作品番号六六四。山形から鹿児島に至る十二県から二十ほどの採話で、「たのきゅう」「何がこわい」や「宝物交換」と比べると数は少ない。こちらは弱みを見せるふりをするのではなく、困らせようとする相手の仕打ちを、逆に有り難いと言つて騙す話である。例えば山形の話と埼玉の話は、次のような内容である（第六卷七七頁、第九卷四八六頁）。

「ありがたい」と言うのが口癖で「ありがたい与平」と呼ばれる男がいた。ある日田に出ると、狐の子のいたずらで石がいっぱい入っている。与平が「ありがたい、石も三年たつと小便たれるというくらいいい田になる。これが馬糞なんかだったら困ったことになるが」と大声で言うと、狐の子が聞きつけて石ころと馬糞と取り替えた。何事にも短気を起こさず、感謝の気持ちを持っている人には、いいことがあるものだ。

（上山市橋下）

欲の深い人が畑を耕して、出てきた石を隣の畑に放りこむ。隣の人はけんかを避けようと思案して、「世が開けて石も役立つようになり、石がなければ

作物はだめになる。石は薬になるし、空気もよく入るといふから」と言う。欲の深い人はそれを聞いて、翌朝暗いうちに、自分の畑へ石を全部運びもどした。

（秩父郡兩神村小森滝前）

この「石肥三年」は彦一話にもなつて、様々なかたちで語り継がれている。「饅頭こわい」「何がこわい」も取り入れた、新潟長岡の話を最後に紹介しておこう（第十卷七五二〜三頁）。

人をだますのがうまい彦一という男がいた。ある夜狸が現われて、彦一に一番嫌いな物を尋ねるので、「饅頭だ」と答え家へ帰ると、狸が窓から饅頭を投げこむ。彦一が饅頭を食べて喜んでるのを知り、狸は悔しがり彦一の田へ石を投げ入れる。彦一は「田に石が入ると、三年間肥料がいらない」と大声で言うので、狸は石をよける。翌日彦一が石がないのを見届けて、「もし田に馬の糞が入っていたら大変だった」と言うのを聞き狸は田に馬の糞を入れた。

（「何が恐ろしい」類話4、長岡市西蔵王町）

引用の羅列が長くなったが、以上、この種の民話が如何に多様で数多いか、その一端を示すことは出来たであ

ろう。「饅頭こわい」系の話は、日本においてはこのような極めて人気の高い話柄として、発展と量産を遂げたのである。

三

さて、「饅頭こわい」「何がこわい」がもともと日本起源でないことは、これも前稿で紹介した「王瑤」から明らかである。『太平広記』が卷三三五・鬼部に、斉の祖神之『述異記』からとして載せるこの小咄は、「わざと怖がつて相手を騙して利益を得る」という、「たのきゅう」「饅頭こわい」と基本構造を全く同じくする内容であった。左に拙訳を再度挙げておく。

南朝宋の大明三年（四五九年）、王瑤という者が都（建康、現在の南京）で病死した。彼の死後、瘦せて長身で色が黒く、肌脱ぎで犢鼻褌（ふんどしの一種）を着けた姿の幽鬼が現れた。いつもその家にやって来て、歌をうたったり人語の真似をしたり、挙げ句にしょっちゅう食べ物の上に汚物を投げ込んだりするのだった。また東隣の庾氏の家でも人に悪さをし、王氏の家と同じことをする。庾はそこで幽鬼に言つてやった、「土くれや石ころなんぞ投げられても少しも怖くはないが、もし銭を投げ込まれたら、本当に困ったこ

とになる」。すると鬼は、新銭数十枚を庾の額に投げつけてきた。庾はまた言つてやった、「新銭なんかでは痛くもないが、ただ烏銭だけは怖い」。すると、鬼は烏銭を投げつけてくること前後六、七回、庾は合わせて百余銭を手に入れたのであった。

伝播の時代、経路については明らかでないが、この話が日本に伝わって、「たのきゅう」や「何が怖い」などに变化していったと考えられる。

さて、日本では数多くの翻案を生んだ『述異記』の「王瑤」（主人公は庾某）であるが、本家の中国においてはどうか。

同じ六朝期の志怪小説を探してみると、幾分似た話として「宋定伯」がある。晋の干宝『搜神記』などに収められる有名な話で、次のような内容である〔4〕。

南陽（河南省）の宋定伯は、若い頃、夜歩きしていて鬼に出合った。尋ねてみると「わしは鬼だ」といい、向こうも「お前は誰だ」と尋ねてくる。そこで定伯は騙して、「わたしも鬼だ」と言った。さらに話してみると、共に目的地が宛の市だったので、連れだって歩きだした。

数里ほど行ったところで、鬼が「歩くのがどうも

遅すぎる。交代に背負い合ったらどうだろう」というので、定伯は賛成した。先に鬼が定伯を背負って、「あんたは、やたら重い。鬼と違うんじゃないか」と言ったが、定伯は「鬼になったばかりだから、重いのか」と答えた。こんどは定伯が鬼を背負ってみると、ほとんど重さがなかった。

こうして再三交代して歩き、定伯がまた「なりたての鬼だから、いったい何がこわいものなのか分からないんだが」と聞くと、鬼は「ただ人の唾だけが厭なんだ」と答えた。やがて川にさしかかり、鬼が先に渡ったが水音がしない。定伯が渡ると、ざぶざぶ音がした。鬼は訝しがったが、これも死んだばかりだからということで、ごまかした。

宛の市までもう少しという所まで来て、定伯は背負った鬼を急につかまえた。鬼は大声を出して騒いだが、縛り上げると大人しくなった。すぐに宛の市に行き、地面に下ろすと、一匹の羊になっていた。そこでこれ売ることにしたが、もとに戻るのを怖れて、唾を吐きかけておいた。そして、羊の代金千五百銭を懐に立ち去った。

鬼を騙して手玉に取る、こちらも強かな男の話である。ただ、ここには自分の弱みを見せるという肝腎の手口は

なく、新米の幽鬼のふりをして鬼の苦手なものを聞き出すという、やや単純な展開である。話としては『述異記』の「王瑤」(庚基)の方が一捻り効かせていて面白く、日本において専らこちらの話が好まれ、多様な展開を遂げたのも頷ける。しかし、我々にとつて意外なのは、中国ではこれと逆の現象が生じている点である。実は「王瑤」系の話は、「饅頭こわい」の数話以外には類話・翻案がなかなか見つからない。それに対してこの「宋定伯」系の話は、後世の翻案を数多く拾い上げることが出来るのである〔5〕。

唐代の小説には類話を見出せないけれども、例えば宋代になると、洪邁『夷堅志』の甲志卷八に、「金四執鬼」と題して次のような話が収められている〔6〕。

福州(福建省)城南の禊遊堂の下に数十畝の公有の蓮池があり、住民の金四が専売の利権を得ていた。彼の家は池から七里の南台にあり、盗人を心配して毎晩夜回りに出かけていた。あるとき脇道を行く一人に遇つて聞いただと、「用事で他に出かけ、たまたま夜帰ることになったのです」と言う。時刻はもう真夜中、もともと肝っ玉の太い金は、相手の立居振舞が人間らしからず、おまけに普段人の通る道でもないことを察して、親切氣に言った、「私の家は江南

に在るんですが、たまたま飲み過ぎ、酔いが覚めても帰れずにいました。あんたと負んぶっこしたいのですが……。あんたが先にここから私を負ぶって合沙門まで行き、そこで私があんたを負ぶって馬舗まで行く。そしたらあんたが、また私を負ぶって浮橋を通るんです」と。するとその人は喜んで約束通りにした。馬舗に着いて下ろそうとしたところで、金は彼をしつかり掴まえ、立て続けに家の者を呼んで火をともして見ると、一羽の歳経たハイタカに変わっていた。そこで縛り上げて焼き殺してしまった。

降って元代では、撰者不詳の『異聞総録』巻一に次のような話が見える「7」。

吉水（湖北省）の七里市の王羊という人物は、屠殺業で生計を立てていた。端平年間（一二三〇～一二三六）のこと、彼の知り合いが早くに一人で出かけた。王の家から二三里にさしかかると、次第に荒れ果てて物寂しくなり、祟りがあるとの噂もあった。疑心と不安に駆られる折から、不意に同行しようと思をかける人物が現れて、「私は疲れてしまった。あんたと交代に負んぶっこして行きたいんだが、どうかね」と言う。そこで彼は「よろしい。わしが先にあんたを負

ぶって某所まで行き、そこからあんたが私を負ぶって某所まで行こう」と答えた。某所に着くと、空が白みかけてきた。その手に毛が生えているのが見えただけで、擦ってみると果たして毛であった。下ろしてくれというのも聞かず背負いつづけ、王の家に近づいたところで、その手をしっかりと掴んで地面に降ろした。すると何と一頭の羊だった。その人は着物の紐を解いて縛り上げ、王の家まで行つて戸を叩いて言った、「わしはお上に借金しているが、この羊一頭があるだけだ。四千で売りたいが、どうかね」。すると王は羊を持ち上げて値踏みをし、「せいぜい三千止まりだ」と応える。そこでその人は言った、「急な入り用ができたんだ。現金でもらえれば、三千で手放そう」。そして羊を縛つた紐をそのままにして「羊が一寸暴れるので、くれぐれも逃がさぬよう」と言い残し、金を持って村まで行つた。帰途、王のところに立ち寄ってみると、ただ紐が残っているだけであつた。そこで人は名付けて王羊と呼ぶようになったとのことである。

また明代では、陸容『菽園雜記』巻八に次の話がある「8」。

村の曾孟源が嘗て夜に出かけ、川を渡ろうとして、一人の知り合いに出会った。「お前を負ぶって涉つてやろう」と言うので、喜んでその言葉に従い、その体に乗ったところでハツと氣ついた、「彼はもう死んだはず、どうしてここにいられようか。きつと幽鬼が私を惑わそうとしているに違いない」と。そこでしっかりとその背にしがみついた。岸に登ると、相手は「下りてもよい」と言う。孟源が一層しつかりしがみつくと、不意に一枚の板になった。抱きかかえたまま民家まで行き、入り口を叩いて火を頼んで照らしてみると、何と火が棺桶の板を焦がしていた。そこでこれを割って焼いてしまった。不吉なこと、自分は死ぬに違いないと思ひ込んだが、結局何事もなく、その後七十を過ぎて亡くなつた。

こうした文献資料の他に、「宋定伯」系の話は中国の民話中に大きな話群を形作っており⁹⁾、この話の長い歴史と人気の程に驚かされる。日本と中国のこうした嗜好の違いも興味深いところである。その理由となると説明が難しいが、わざと弱みを見せるといふ捻りより、うまく騙してやつつける筋の方が単純明快ですつきりすると感じられたのであろうか。

また、やつつける相手が幽鬼であるのも、中国的な特

徴といえる。幽鬼は恐ろしい者に違いないが、ただ古来中国には、如何なる幽鬼や妖怪変化であろうとも正しき心を持つ人、有徳の人に敵うことはないという、強い信念があつた¹⁰⁾。修行を積んだ道士や高僧の前では、如何なる妖怪変化も正体を現わして降伏せざるを得ない¹¹⁾。人間が優位に立つこの幽鬼観の下にあつて初めて、「宋定伯」系の話の發展はあり得たと考えられる。

一方、日本の場合には狐・狸などの化ける動物、大蛇・クモの妖怪あるいは天狗などが相手で、幽鬼は全く見当たらぬ。平安期の御霊信仰に代表されるように、死者の怨霊、幽鬼に対する恐怖の伝統を持つ日本においては、これに関わつたならどんな祟りがあるか、先ずはその心配の方が先に来る筈である。中国とは事情が異なり、幽鬼を相手にする「宋定伯」系の話は、日本では發展する土壤を持たなかつたのである。

四

以上、落語「饅頭こわい」「田能久」に絡めて、中国・日本の幽鬼観にも触れてみた。

こうした幽鬼に対する人間の優位は、中国の怪談から増幅する恐怖の余韻を奪っているのであるが、怨霊や祟りを極度に恐れる日本的な心性にとっては、時にその逞しさが羨ましくもなる。

ということと最後にもう一話、清の楽鈞『耳食録』卷三の「田売鬼」を紹介しておく。これは、田乙という怖いものの知らずの男が幽鬼二人を騙して捕え、二羽の鴨になったところに変身封じの鼻水をかけ、市で売って三百銭稼ぐという話。要するに、「宋定伯」のストーリーを丸ごと剽窃した展開である。彼はその後、婦人の髪（幽鬼を誘き寄せる呪力を持つようである）を手に毎夜幽鬼狩りに出かけ、捉えた鬼を売って生計を立てるようになる。「田売鬼」と呼ばれるのは、そのためであった。——怖さの微塵も見られない話で圧倒されるが、その最後は、何と次のように結ばれている。

「羊や豚、魚などに変身した幽鬼の」売り残しが出ると、自分で煮てこれを食べたが、味はとてもうまかった〔12〕。

臆病な私には捕まえることさえ怖いのに、ここまでゆくと最早啞然とするしかない。しかし、これでは鬼も浮かばれないし、それに余りに情無い。「たまには反撃して痛い目に遭わせてやれ。勇気を出せ！幽鬼」と、思わず親父ギャグのエール一つも送りたくなるのである。

注

1 高座に掛ける嘶家の方も多くないようで、視聴覚資料として

管見に入ったのは、CDでは六代目三遊亭圓生『圓生百席』第二七卷（ソニーレコード、一九九七年）、立川談志『立川談志ひとり会 第八集』（コロンビア・ミュージックエンタテインメント、二〇〇四年）、DVDでは『立川談志ひとり会 第二期・第一集』（竹書房、二〇〇七年）の三点のみである。

2 例によって稲田浩二『日本昔話通観・第二八巻 昔話タイプ・インデックス』（同朋舎出版、一九八八年）による（五〇三頁）。

3 本心から「金がこわい」という台詞は、埼玉の話に見える「親孝行が好きで、人に悪事を働かせる金が嫌いだ」のみ（第九卷四五六頁）。本心が明瞭に示されていない話、騙そうとの魂胆が明らかな話が殆どである。

4 汪紹楹校注『搜神記』（中華書局、一九七九年）によれば、原文は次の通り。この話は、『太平広記』卷三二一・鬼部にも収められているが、出典を『列異伝』とし、若干の字句の異同が見られる。他に『法苑珠林』『芸文類聚』『太平御覧』などにも引かれる、よく知られた話である。

南陽宋定伯、年少時、夜行逢鬼。問之、鬼言、我是鬼。鬼問、汝復誰。定伯誑之、言我亦鬼。鬼問、欲至何所。答曰、欲至宛市。鬼言、我亦欲至宛市。遂行數里。鬼言、步行太遲。可共遞相擔、何如。定伯曰、大善。鬼便先擔定伯數里。鬼言、

卿太重、將非鬼也。定伯言、我新鬼、故身重耳。定伯因復擔鬼、鬼略無重。如是再三。定伯復言、我新鬼、不知有何所畏忌。鬼答言、唯不喜人唾。於是共行、道遇水、定伯令鬼先渡、聽之、了然無聲音。定伯自渡、漕漕作聲。鬼復言、何以有聲。定伯曰、新死、不習渡水故耳。勿怪吾也。行欲至宛市、定伯便擔鬼著肩上、急執之。鬼大呼、聲咋咋然、索下、不復聽之。徑至宛市中、下著地、化爲一羊、便賣之。恐其變化、唾之。得錢千五百乃去。當時石崇有言、定伯賣鬼、得錢千五。……

5 「宋定伯」系の話に関する論考には、顧希佳「捉鬼売錢的漢子——“宋定伯売鬼”故事解析」（劉守華主編『中國民間故事類型研究』華中師範大學出版社、二〇〇二年所収）があり、類話・翻案を博搜して詳細である。顧氏は古籍から三十余、現代の採話記録から六十余例を発見したという。小論もこの論考から多くの教示を受けている。

6 何卓点校本（中華書局、一九八一年）によれば、原文は次の通り。

福州城南禊遊堂下有公蓮池數十畝、民金四權其利。其居在南臺、去池七里、慮有盜、每夕輒往巡邏。嘗遇一人行支徑中、詰之、曰、我以事它適、偶夜歸耳。時已三鼓、金素有膽、視其舉措不類人、又非人所常行路、乃好謂之曰、我家在江南、偶飲酒多、覺醉不可歸、欲與汝相負。汝先自此負我至合沙門（原注、去城二里）我乃負汝至馬鋪（原注、去城四里）、汝復負我過浮橋。其人欣然如所約而去。至馬鋪欲下、金執之甚急、連聲呼

7 家人燭火來視、已化爲一老鵝、乃縛而焚之。筆記小說大觀本によれば、原文は次の通り。

吉水七里市王羊者、以屠宰爲活。端平年間、有相識嘗早獨出行。未至王居二三里、稍荒涼、相傳有祟、其人心偶疑畏。忽有人呼之同行、曰、吾倦、與爾更迭馳負如何。其人曰、善。我先馳爾至某處、爾又馳我至某處。及至某處、天微白、彷彿見其手上有毛、摩之、果毛也。其人求下不許。遂馳之不置。將近王居、謹執其手、置於地、乃一羊也。其人解縲繫之。執至王居、叩門語王曰、吾負官錢、僅有一羊、欲賣四千如何。王提羊估度曰、止直三千。其人曰、但吾欲急用。幸以見錢酬我。我提三千授之。其人并留縲繫羊、語王曰、羊稍躑躅、謹固勿失。遂攜錢之邑。及歸過王、惟縲存焉。人遂名爲王羊云。

8 佚之点校本（元明史料筆記叢刊・中華書局、一九八五年）によれば、原文は次の通り。

里人曾孟源嘗夜行、有水當涉、遇一舊識云、吾負汝過。孟源喜從之、及上其身、忽悟云、此人已死、安得在此。必鬼欲迷我耳。乃堅附其背、既登岸、負者云、可以下矣。孟源附之益堅、忽變爲一板、抱至民家、叩門乞火燭之、乃火焦棺板也。劈而焚之。深以爲不祥、自分必死、然竟無恙、後年踰七十而終。

9 前掲の顧希佳論文による。顧氏は「宋定伯」系の数多くの民話を、二つの型に分類して紹介している。なお、文献資料で管見に入ったものとしては、他に紀昀『閩微草堂筆記』卷八

の姜三莽の話、許叔平『里乘』巻五の「産鬼畏傘」がある。顧氏の採話三十余篇中には収録済みであろうが、論文中には挙げられていないので付け加えておく。

10 たとえば晋の干宝『搜神記』が巻一九に載せる、孔子が陳で鯀の化け物に遭った話の中で、彼は次のように言う。「すべて物は年を経て怪異を起すが、殺してしまえば、それで終りとなる。一体何を恐れることがあろうか（物老則爲怪、殺之則已、夫何患焉）。相手は幽鬼ではないが、妖怪変化に対する聖人の態度が端的に語られていて興味深い。前稿で触れた中国科学院文学研究所編『不怕鬼的故事』（人民文学出版社、一九六一年）所収の作品中にも、心正しければ幽鬼を怖れる必要がないとの考えがしばしば窺われる。ここには、時代を清朝まで下って紀昀『閱微草堂筆記』から、幾つか抜き出し、おこよう。上海古籍出版社の汪賢度点校本（一九八〇年）により、簡体字を改めて引用する。「鬼が人を侮るのは、つねに人の恐怖心に乘じてのことである。〔姜〕三莽は鬼を捕縛できると確信して、心の内ですでに鬼を蔑視し、その気焰は鬼を怖れさせるに充分であった。だから鬼は逆に彼を避けたのである（鬼之侮人、恒乘人之畏。三莽確信鬼可縛、意中已視鬼蔑如矣。其氣焰足以懾鬼、故鬼反避之也）」（巻八）。「ただ有道の人のみが、よく魂魄を制御できる（惟有道之人、爲能制魄）」（巻一〇）。「すべて妖怪が人に媚びて誑かすのは、みな自らそれを招くのである（凡妖怪媚人、皆自招致）」（巻一

三）。「心の在りようが正しければ、冤鬼であっても如何ともしたい（立心端正、冤鬼亦無如何）」。「狐の畏れる者は五つ、曰く凶暴な者…、曰く術士…、曰く神靈…、曰く福有る者…、曰く徳有る者…（狐所畏者五、曰凶暴…、曰術士…、曰神靈…、曰有福…、曰有徳…）」。

ただ、中国の怪異譚に登場する幽鬼については、知識人と民衆の幽鬼観あるいは文芸観の相違にまで掘り下げた、さらに精緻な考察も必要であろう。この点に関しては、金文京『中国小説選』（鑑賞中国の古典・角川書店、一九八九年）に指摘がある（『牡丹灯記』一六一―二頁）。

11 志怪・神怪小説に登場する道士や高僧達は、幽鬼や妖怪を折伏する圧倒的な力を持つ。たとえば、「牡丹灯記」（明・瞿佑『剪灯新話』の鉄冠道人や、「白娘子永鎮雷峰塔」（明・馮夢龍『警世通言』の法海和尚など。

12 この作品の存在については、前掲の顧希佳論文を通じて知った。田乙が幽鬼狩りに出かけるあたりから、筆記小説大観本によつて原文を引用しておく。

後毎夜挾婦髮少許、隨行野外索鬼、鬼多來就之、輒為所制。或化羊豕者、變魚鳥者、悉於市中賣得錢、以市他物。有賣不盡者、亦自烹食之、味殊甘腴。

なお顧氏論文は、この「田亮鬼」を劉守華『中國民間故事史』（湖北教育出版社、一九九九年）が取り上げ、「社会大変革前夜の中国民衆の狂奔不羈の心態」として高く評価してい

る（九四頁）点に賛意を示す。しかし鬼を食べる話は、実は「田壳鬼」が最初ではない。『太平広記』卷三六三・妖怪部の「韋滂」（出典は唐・皇甫氏『原化記』）も、鬼を射殺して肉を食べている。よく煮た上でなますにして食べたところ、「尤も芳美なるを覚ゆ」とあり、やはり美味いもののようである。また注10に挙げた『搜神記』の話でも、孔子と弟子達は魃の化物を殺して食べており、「子路これを煮るに、その味は滋く、病者は興^おきる」とある。従って劉・顧両氏の「田壳鬼」評価も、そうした「食鬼」故事の歴史のなかで、あらためて検討し直してみる必要がある。

〔追記〕

「何がこわい」の日本・中国以外の類話については、稲田浩二『日本昔話通観・研究篇2 日本昔話と古典』（同朋舎、一九九八年）が、中国チベット族、外モンゴル、ベトナム、シベリア、ミクロネシアなどの話を紹介している（五五七〜八頁）。他に崔仁鶴『韓国昔話の研究』（弘文堂、一九七六年）所収の「何が怖い」があり（作品番号一四六、二一九頁）、この韓国の話が最も日本の「たのきゅう」に近い。以下にその梗概を挙げておく。

- 一 ある人が山で女に会った。
- 二 女の正体は青大将である。これまで九九人の人間を食べた。あと一人を食べると昇天するという。

三 彼は最後の願いだから、家族に一度会わせてくれるよう頼んだ。

四 別れるとき彼は女に「何が一番怖いか」ときいた。すると女は「タバコの脂だ」と答えた。女も彼にきくので「お金だ」と答えた。

五 彼は脂をたくさん持つて山にきて、青大将を悩ませてから逃げた。青大将も仇討ちをするつもりでたくさんのお金を彼の家の庭に置いて行った。

タバコのヤニまで共通していて、興味深い。

なお煙草のヤニが蛇退治に効くことは、日本では江戸期に広く知られ信じられていたようで、橘春暉『北窓瑣言』後編・卷之一には、煙草のヤニで蛇毒を消す話が見える（『新装版 日本随筆大成』第二期・第一五巻、一九九五年、二六五〜八頁）。また現在でも、煙草の吸い殻を浸した液を蛇除けに使うとの由、家人が御近所から伺った話である。